

公民館と高齢者

—生涯学習の可能性と社会的孤立の交差点から—

川口 一美

要旨

現代日本の社会問題に対して、公民館の活動は重要な役割を担っている。公民館での学びは、高齢者自身の心身の健康保持や生きがい、仲間作り等様々な側面をもつ。

とりわけ高齢者が公民館で学んだ知識や技術を地域に還元することは、少子高齢社会に生きる私たちだれもが直面する可能性のある問題、地域の孤立防止に役立つ。また公民館で学んだ高齢者が生涯元気であることが、閉じこもりや介護から遠ざかるコツでもある。自分自身にとっても、地域にとっても、有用であり、またそのこと自体がもっと社会に認識される必要があるのではないかと考える。

本稿では、公民館での高齢者の活動の現状を整理し、そこから見える課題を明らかにし、活用可能な社会資源としての公民館や公民館活動について浮き彫りにしていきたい。

公民館の活動については、今後プログラムを吟味し、地域の高齢者や孤立している人々を組み込むことに力を注ぐ必要がある。

とりわけ、公民館での学びや仲間は地域に根付くと社会関係資本（ソーシャルキャピタル）となり、人々のセーフティネットとなり機能する。

よって、公民館活動を考える上で、人材、社会資源の養成と地域にある福祉ニーズへの積極的な関わりの姿勢が必要である。

はじめに

日本は今後超高齢社会と言われる時代に突入する。この社会は子供が少なく、高齢者が多い社会。言い方を変えれば、社会全体を支える人が少ない社会と言える。今後の日本の社会に対しての見通しは先が見えず、暗いイメージがつきまとう。例えば、介護の問題や弱者として的高齢者、老害などがそれである。しかし、良い面も存在する。社会が安定する（成熟した社会として）。元気な高齢者が増える。高齢者が一人いると、図書館1つ分の知恵に匹敵する

と言われるが、高齢者の発言力が増すことで様々な知恵を私達にもたらしてくれるかもしれない。

高齢者の知識や力と生涯学習が結びつくことで、今後の超高齢社会にまた一つ高齢者が活動する場、(高齢者が必要とされる)社会資源としての捉え方が浮かび上がってくる。これまでも高齢者や生涯学習はおのおの存在していたが、それらが繋がり、活用されることで地域の中の生涯学習の拠点である公民館等の役割が見直され（再発見され）、再構築されるのではないだろうか。

1. 日本少子高齢、核家族化と公民館活動

そもそも日本の高齢化がいつから始まったのかと言えば、1950年（昭和25年）には、高齢者は総人口の5%にも満たなかった。しかし1970年（昭和45年）頃から高齢者が急増した。1970年～1994年の24年間で、日本の高齢化率は、7%から14%と倍増した。たった24年間で高齢化率が倍増した国は、全世界的に見ても存在しない。先進国は全体的に高齢化が進んでいるが、フランスなどは100年以上かけて、イギリスやアメリカも50年以上かけて高齢化の波が来ている。日本の高齢化の速さは類を見ない速さと言える（資料1）。

またその中で日本の家族を取り巻く環境も変化した。古くからの日本の家族は、例えば長男や長女が家を継ぎ、親と同居をする複合家族の形が多かった。だが、戦後高度経済成長を境に、核家族化が進んだ。よって、高齢者を取り巻く家族環境も変化した。

よって、近年の家族は、核家族が複合家族（3世代家族）を上回り、特に高齢者に関して言えば、夫婦世帯、一人暮らしが目立つ状況にある。

地域社会との環境についても、戦前から続く地縁や血縁の関係性が核家族化や価値観の変化で薄まりおのおの「個」、「孤」の状況が作り出されていった。

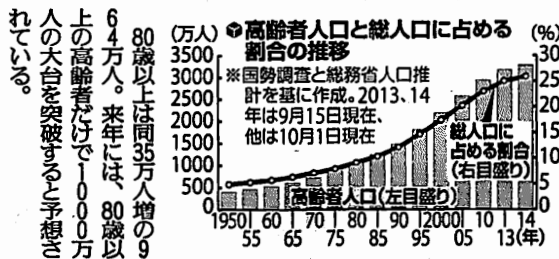
また高齢者の問題として、定年や引退によって人や地域との関係性が薄くなり、加えて身体の老化現象でより家か

「8人に1人」75歳以上

総務省は、15日の「敬老の日」に合わせて日本の高齢者人口の推計（9月15日現在）を発表した。65歳以上の高齢者は前年比111万人増の3296万人で、総人口に占める割合は同0.9増の25.9%となり、いずれも過去最高を更新した。

男女別に見ると、男性1421万人、女性1875万人で、女性の方が454万人多い。総人口に占める男女別割合は男性が23.0%、女性が28.7%だった。年代別では、75歳以上が前年比31万人増の1590万人。総人口に占める割合は12.5%で、初めて8人に1人が75歳以上となった。

65歳以上 3296万人



資料1 高齢者人口と総人口に占める割合の推移

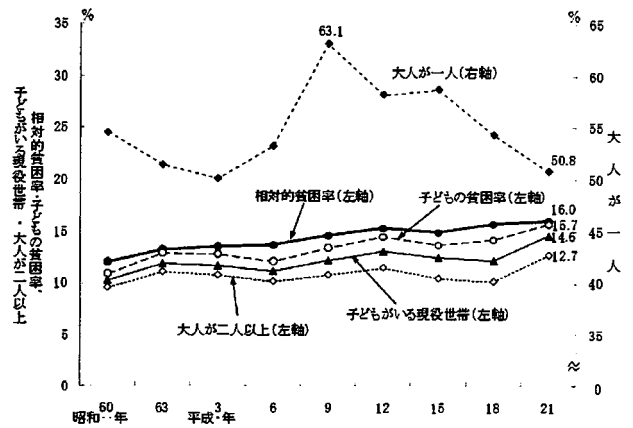
ら出てこない「ひきこもり」や「孤立」が目立つようになってきた。

平成22年度版高齢社会白書では、「家族や地域社会との交流が客観的に見て著しく乏しい状態」を社会的孤立（の状態）であるとして、「単身世帯でも、家族や近隣・友人との交流がある状態は「社会的孤立」ではなく、一方、家族と同居していても、家族との日常的な交流がない上に、外部の近隣・友人とも接触が乏しければ、「社会的孤立」に陥る場合もある」と捉えている。

加えて、内閣府が2008年に行った「高齢者の生活実態に関する調査」では、「困ったときに頼れる人がいない」としたものが全体で3.3%、男性単身世帯に限ると24.4%と高齢者の孤立が社会問題化してきているのを見て取ることができる。

また、日本の貧困率は、2007年の相対的貧困率は全体で、15.7%、子供は14.2%となっている。2000年代半ばまでの日本の相対的貧困率は、OECD（経済協力開発機構）に加盟している30カ国の中でワースト4位、大人一人（例えば母子家庭等）の子供世帯では、ワースト1位となっている。貧困率は年々上昇し、家庭や地域に貧困の連鎖が広がっている（資料2）。

そこで本稿ではとりわけ高齢者が活動し、お互いが助け合える場としての、公民館の活用（公民館活動）に注目していきたい。とりわけ、公民館は生涯学ぶことができる場として、また地域の拠点として社会問題と関わり、取り組



注：1) 平成6年の数値は、兵庫県を除いたものである。
 2) 貧困率は、OECDの作成基準に基づいて算出している。
 3) 大人とは18歳以上の者、子どもとは17歳以下の者をいい、現役世帯とは世帯主が18歳以上65歳未満の世帯をいう。
 4) 等価可処分所得金額不詳の世帯員は除く。

資料2 日本における貧困率

む場所としての機能を潜在的に持っていると思う。

今後の日本の超高齢社会に向け、とりわけ高齢者の孤立を防ぐ社会資源としての公民館の価値を既存データと公民館活動のこれまでの歴史から紐解き、明らかにした上で再評価し、その可能性、活用のしかたを明らかにしたい。また本来の公民館の役割から地域の社会的孤立を防ぐ機能が備わっていること、またその土壌をもっと活用すべき（できる）であることを、これまでの公民館の活動から示し、今後の地域の関係性を深めるアイテムの一つであるということ提言していきたい。

2. 福祉の生活課題と公民館

公民館は、教育・文化に関する機関である。その公民館の目的は、「実際に生活に即する文化的教養を探求し、社会福祉の増進に寄与すること」として掲げられている。公民館は、町村振興の機関として位置づけられ、一般的に教養部、図書部、産業部、集会部があり社会事業や慈善事業団体等と緊密な連絡のもとに協力する事業にも取り組むことが求められている。特に、公民館が、生活扶助や生業扶助、葬祭扶助、宿所提供、託児事業、授産事業にも取り組むことが指示されている。

このようなことから公民館は、福祉に関わる事業を展開することが求められているということがわかる。

とりわけ、貧しく孤立しがちな住民にアプローチする活動は、これまでも公民館で行われている。とりわけ、高齢者の生きがいや社会参加に関しては、1970年代以降急速に広がっていった。

(1) 高齢者の生きがいと社会参加

高齢化が進んだ1970年代以降は、公民館活動でも高齢者に関するプログラムが数多く展開された。そこでは、高齢

者の健康増進や生きがいづくりとして体操、趣味など様々な内容があった。1980年代になると、単なる趣味で終わらせず、人生や社会の意味を考えるような自分を振り返るような自分史の講座、1990年以降には、自分たちの地域の問題に取り組むというような学びを深め、問題に取り組む(役割として取り組む)様なものまで様々な展開を見せた。介護保険が始まった2000年以降は、それまで外に出てくる(意欲的で)元気な高齢者を中心としていたメニューからリハビリや介護予防、なかなか外や地域に出てこない高齢者も公民館に足を運んでもらうための機会として考えたプログラムも多くなった。

このような流れを見てくると公民館と高齢者の関わりは、年々広がりを見せ、範囲も拡大していることがわかる。その中で、元気な高齢者も貧困、介護等困難を抱えた高齢者にも社会参加の場や学習の場として公民館が存在していることが見て取れる。

(2) 地域と人との結び付きと生活課題

公民館活動は地域の中で人の繋がりを多くする活動をしてきた。この公民館は、一般的な教育の場と異なり、ともに学びともに教え合い、ともに地域をつくるという流れがある。

特に高齢者に関して言えば、定年退職後の人が働くことや地域の一員として役割を持つきっかけになり、それまでの人生で体得している知識や技術をお互いが活用し合い、地域の問題に取り組み、地域を、生活を良くしていく。みんなで力を合わせ、社会やその社会の支援に関わっていくことも仕事であり、働く事であり役割に他ならない。

地域に住み、地域にいるからこそ地域の問題がわかる。今後の人口減少社会において、その地域社会の問題を解決するためにその地域にある社会資源をいかに使うかが鍵となる。

(3) 地域と公民館活動を繋ぐもの(現在の公民館活動の課題と限界)

公民館が福祉の問題に向き合うものであることは先にも述べたが、これまでの公民館活動は、市民の共通課題(例えばエコや介護予防など)、個人の生きがい、文化活動については活発に行ってきたように思う。しかし反面、地域の抱える問題(貧困、孤立など)については、正面から取り組む地域は少なかったように思う。多くの市民が必要や問題だという認識は持ちながらもなかなか具体的な活動にまで至っていなかった。

これには公民館の活動で解決するというよりも、行政が

介入して行く福祉の問題として、同じ土俵にのることを控えた感すらある。

だが、公民館の活動には、話し合いの学習や共同学習という方法がある。この中で調査をし、実態を知り、この問題と向き合い、解決の方向を見いだそうと住民が立ち上がる、この形の問題解決方法を実践に活かさない手はない。

(4) 公民館がつなぐもの(今後の公民館活動の可能性・再評価され、超高齢社会の社会的孤立をへらすアイテムの一つとして活用すべき活動)

公民館の活動は、一人一人が(公民館のプログラムを通して)成長(学ぶ)する側面もあるが、もう一つ、その地域の中に人と人との繋がりをつくることも意味する。これまでの立場やその人々のしがらみではなく、公民館の<いま-ここ>で、ともに学び、関わることのやりとりを通して、<教え-教えられる>、<支援する-支援される>だけではない関係を体感し、ともに生きがいをもって暮らせる仲間=同じ方向を見ている仲間を得る。また、そこでの体感を日々の生活にも繋げ、地域の中で互いが目標とする環境に向け、活動していく(実践としての学び)。

今の日本の困難、人々が直面している問題は、個人的なものではなく、人と人、人と環境の関わりによって改善されるのではないだろうか。おそらくこれらの問題は、社会構造的に再生産される部分も多く、個人的な問題とは言い切れない。誰しもの関わる問題だからこそ、社会問題として人々は知り、それに対して立ち向かう必要がある。それを福祉の専門職や問題を抱えた対象者だけに任せるのではなく、地域の中でおきていることとして、地域住民に知らせるため、誰しものがアクセスしやすい公共性のあるもの、公民館がもっと注目され、かつ社会問題と向き合い、声を大にして活動をしてほしいのではない。

住民一人一人の問題意識を高めるには、行政の指導や啓発も大切だ。加えてそれより身近な、かつ住民のボランティアマインドの高まりを頼りにすることも必要だ。しかし最も重要なことは、外から問題として示され、誰かがやってくれるのを待つなどの受動的なものではなく、自発的な地域への誘いや自らが動くきっかけ、仕組みではないか。そのためのステップとして公民館活動や学びを活用すべきではないか。

3. 公民館活動と社会的に活動範囲が狭まっていく高齢者の接点(今後の活用のしかた)

(1) 高齢者と老後の余暇活動

団塊の世代が高齢者となっている現状、定年後の高齢者

はどのように過ごしているのだろうか。会社で働くとりわけ男性には、定年前から定年後の生活について、過ごし方の教育を定年前に教育される機会がある人も多い。定年を意識し、近年はワークライフバランスが叫ばれて久しく、趣味や生活について自分自身で計画、振り返ることもあるだろう。自身の描く退職後の生活ができるかどうか、できていれば充実した日々を過ごすだろう。しかしその通りにならない場合は、外に出る回数が減り、家に籠もることも多くなるのではないか。

女性の場合は、定年を迎えても家事労働等定年前と変わらない日常を過ごす場合も多い。自分たちの拠点(ホーム・地元)は変わらないため、男性ほど大きな変化は無いという女性も多い。また、周りを取り巻く、人や環境もこれまで培ったものがそのままあることが多いため、人間関係等を新たに構築することも少ない。よって、それまでと変わらない生活が続くことも多いが、金銭や自身の心身の状況、家族の介護などの問題があるとやはり孤立したり、家に閉じこもったりすることもあるだろう。だが、今後女性の社会進出が進めば、男性の退職後の心身状態や関係性を体験する女性も増える可能性がある。

このようなことが予想される現在、高齢者となった人々はどうのような生活を送っているのだろうか。それまでの世代と異なる価値、生活様式をもつ団塊の世代高齢者、この人たちの余暇活動は旅行や趣味、スポーツ、仕事等様々だ。(総務省統計局の「社会生活基本調査」によれば、高齢者の余暇活動は、70歳を過ぎると極端に減少する。特に、外での身体活動は60代前半から減少してくる。)

年齢とともに遠出する外出機会が少なくなり、自宅に閉じこもりがちになる状況が見て取れる。活動範囲が狭くなっていく高齢者の活動範囲の現象を防ぐ場所として、(これまで公民館を活用していない高齢者が活用するとしたら)少しでも閉じこもりを防ぐ、外に出る機会として公民館活動(学ぶ、学んだことを実践する、その実践により地域の孤立者に役立つ)を使わない手はない。

(2) 公民館における高齢者活動及び高齢者活用の機会

元気な高齢者もそうでない高齢者も学び、関わりをすることができるとして今後の超高齢社会の中で公民館の生涯学習は何ができるのだろうか。またこの貴重な社会資源を地域社会に還元するために、公民館活動のできることを考えたい。

公民館活動で高齢者に対してできることは、いくつかの活動に分けられる。①心身の健康保持(介護予防・生きがい、仲間作り)。②地域活動(ボランティア、地域支援者養

成)。③高齢期、その後を考える場(高齢期、終末期、死に対する学び(死の準備教育)等)。これらは特に高齢者限定で行う必要はないと思うが、先にも述べた閉じこもりや生きがいの欠如、背後にある社会問題を考えると高齢者に対して率先して実践すべきことと思える。

①身の健康保持

これは健康体操や介護予防の体操、運動等があげられる。心身の健康保持に行うもので、家で一人、各自で行っても良いが、仲間がいた方が続くだろう。(日本の高齢者は、一人では出かけにくい、誰かが誘ってくれれば、出かけるという人が大半だ。)また、会場が近くにある(公民館)ことも長続きするには重要で、また、「声を掛け合って口コミで広がり、気楽に参加できる」気安さというスタンスが受けている理由なのではないか。

②地域活動

これは地域のサポーター養成や自身の能力を地域や社会に還元するもの。例えば、ボランティアやヘルパー等養成し、地域で活動してもらう。やり甲斐や自身の能力を活用、還元するという点では、自発性が求められる。

しかし、老人大学等で福祉や地域を学び、その問題やニーズを見て、「一肌脱ごう」とか「自分がやろう」という気分になる場合もある。よって、その福祉人材、社会資源であるという気づきの学びをすることも公民館の重要な役割であると言える。

また福祉の学びやボランティア養成は、まずは公民館に通い学ぶことで自身の心身の健康が保たれ、その次に他者への支援(ボランティア等での活躍)で、心身の健康も保ち、地域を助けるという一石二鳥の構図もできる。これを活用することで地域内のニーズと社会資源のマッチングは飛躍的に進むのではないだろうか。

例えば、公民館で学んだ(高齢)者が地域のボランティアで見守り活動をしたら、いくつもの活動が少ない負担(活動)で実践できる。例えば安否確認、実態把握(調査)、普及啓発、交流、実際の活動を行い可視化する等である。

表1 高齢者見守り活動の類型

活動の形	活動内容
安否確認	居宅への訪問等で要援護者の安全確認 ふれあい訪問、情報誌の配布など
実態把握	要援護者の把握/地域活動の実態把握 地域活動の実態把握
啓発	活動の啓発、普及のためのパンフレット配布や 講演会の開催 説明会や勉強会など
取り組み体制の構築	地域の社会資源が集まり、情報交換や協議をする。 協働の手順や分担等のシステムを可視化
交流・参加の場	たまり場と人呼び込む 食事会やサロン活動等

③高齢期やその後を考える場

少子高齢社会で、核家族化された現在は、生老病死が身近にない。もちろん介護や病気は社会問題として大きく取り上げられるが、どれも自宅ですっと間近で見ることが無くなった。

人生 80 年以上の現在だからこそ、定年後、高齢者となつてからの生活をどうするか、最後までどう生きるかを考える必要があるだろう。寿命の短かった戦前や戦後すぐは、(高齢者となつても) 死を考える余裕すら無かっただろう。

現在は住み慣れた自宅で亡くなるより、病院等で亡くなる方が圧倒的に多い。また、「介護が必要になったら…」、「もし認知症になったら…」、「寝たきりになったら…」これらが誰しも可能性のあることであり、自身がそうならなくても親や配偶者もしかしたら、子供の問題として身に降りかかってくることなのだ。

元気でいたとしても最後までどういう生活をしたいか、どう過ごしたいか、近年エンディングノートや自身のこれまでを自叙伝や生活史としてまとめ、振り返る講座等も盛況だ。

高齢者の学習課題、問題について考え、学習・実践していくときまず、興味関心を持ち、自身の問題だと気づくことが重要なのだと思う。自らのことを語り、自らの立場を学び、今どんな問題を抱えているのか(今後どんな問題と向き合うのか)、同じような境遇の仲間と関わることで自分の、隣の人、地域の問題であることに気づき、地域で日々の生活や他者への実践としてフィードバックしていくことができるのではないか。

(3) 高齢期の学習者の地域還元が孤立・孤独の救世主となる

上記であげた①～③を公民館のプログラムとして連動させ、地域社会に投入した場合、地域の孤立した人々を救う重要な社会資源となる可能性がある。

その理由は、孤立した人と接点ができることで孤立・孤独が(物理的に)防げる。また、実践に感化され仲間が増えれば、活動やその人自身がより活性化される。

この実践は、共同学習としての実践であるとも言える。地域や自身の生活を自身の目で見て(調査し)、実態を知り、願いを語り合いながら、課題の解決の方向性を模索し、日々の実践を各々が(もしくは組織化し)行っていく。各々が関わる中で、問題が解決する(例えばこの場合は人との接点がない→孤立が防げる。もしその人の孤立が防げなければ、誰につながれば良いかを考え、繋げるなど)

(4) 公民館の課題

高齢者を受け入れ、生活課題(社会問題)を学習課題とすること、それをサポートするという意識(福祉や社会問題は行政のすることというような考えをやめて)が重要となるだろう。「地域の住民(本稿ではとりわけ高齢者)が自らの意志で、地域の高齢者や問題と関わり、解決していく。そのための学びの場とプログラムそして仲間を提供すること。公民館の職員の知識や知恵、スキル、そして公民館に来る人たちの知恵や技術これらを最大限活かしながら、マッチングさせともに学び、実践するシステムを構築する必要がある。

現代の社会は情報であふれ、顔も知らない人と繋がることもできる。だが、情報が多すぎ、自分に必要なものをピンポイントで選べない、また身近な生活場面、地域では繋がっていない、そんな実状を丁寧に公民館の職員は支え、繋げていく必要があるのではないか。そのためには公民館に来る人々の声に耳を傾け、地域出向くアウトリーチの姿勢も大切なのではないだろうか。公民館には届いていない地域のニーズを発掘するためだ。

4. 地域ニーズとネットワーク

社会問題としての地域の孤立や高齢者について見てきたが、現在の地域で高齢者×孤立で問題となっている具体的なことは以下のようなものがあげられる。例えば、孤独死(孤立死)に始まり、徘徊(死)・不明者、虐待、オレオレ詐欺(消費者詐欺)、災害時要援護者、日常の困りごと、家族問題(一次的な支援も含む)(年金、病気、障害等)。

これらを防ぐためには孤立する人の周りに複数のセーフティネットを張り巡らす必要がある(孤立を防ぐ網の目のようなもの)。だが、この身の回りのセーフティネットや自身のネットワーク(社会資源と言っても良いかもしれない)を築くことができるのは、文化資本に恵まれている人で、これに恵まれていない人は、努力してもなかなかセーフティネットを張り巡らすことはできない。

この差が、孤立するリスクのある人々はより孤立していく歪み、所以なのである。高齢者はセーフティネットを自ら張り巡らすのが難しい人たちである。だが高齢者にとってはこのような社会的状況は誰にでも起こりうるといえる。

表2 高齢者を取り巻く地域課題

具体例	課題内容
孤独死・孤立死	死亡時誰にも看取られず、死後長期間発見されない状況。 背景として単身高齢者や高齢者夫婦の増加 支援、関わりを望まない単身者、貧困、病気等 要因は様々。
徘徊死・不明者	認知症等で屋外を徘徊し、行方不明や死亡する ケース。 地域の不理解等もあり、発見、保護に時間がか かる。 介護者の責任問題の議論も近年では活発
消費者被害	高齢者や障害者等の消費者被害。 特に一人暮らしの高齢者。オレオレ詐欺等 被害に遭った自覚のない人も多い。
災害時要援護者	近年の災害、地震等で高齢者、障がい者、外国 人等 災害弱者として避難支援等を要する。
日々の生活の困りごと	一人暮らしの高齢者等はゴミ出し、電球交換など ちょっとした時々の困りごとを頼める人がいない。
一時的な要援護者	(病気やけが等) で支援が必要だが、頼める人が いない。 公的サービスは、制度外で活用が難しい等。
社会問題の連鎖	要介護の親と障害のある子、要介護の親と無職 の子など 問題が複数重なるケース

(1) 人との繋がり和社会関係資本

これまでも公民館は学ぶ場としてのものだけでなく人と人とを結ぶ場所でもあることは述べた。そこでの人と人との結び付きが、その人たち、または地域の人のセーフティネットとなるかもしれない。それは、持ちつ持たれつの関係信頼性、互酬性の規範や地域のネットワーク(絆)は社会関係資本(ソーシャルキャピタル)と呼ばれる。この社会関係資本によって、協調性やご近所の支え合いといった付加価値(市場評価としては現れにくい、だが現代社会に必要な)が生み出される。

また、社会の中で、家族や友人の様な強い結び付き(強い紐帯)だけでなく(もしくはこの繋がりが無い人にとっては)、「弱い紐帯」を活かし、情報や地域のちょっとした関係性として活用できると考える。日常生活中、不特定多数の人の関わりを(公民館活動の学舎実践で)意識的に作り、それを生かすことで、意識的にセーフティネットを作り出すことができるのではないか。

(2) 社会関係資本を生み出す場としての公民館

地域の中で学び、問題を発見し、取り組む。この一連の活動が現代社会の問題の地道な解決策となりうる。地域の声をちょっとした地域の人々や学習者から聞き、そのニーズに対する活動者を学びの場で養成する。もちろん本来の公民館活動としての自らの学びに対しても忘れてはならないが。

現代社会は今後、高齢社会の最後の上り坂を迎える。その時に公民館がその問題の解決の鍵として地域のネットワーク構築拠点として積極的に地域や高齢者と(または孤立する人と)関わる事ができたら、そのためにも高齢者や地域に対して積極的な関わりや取り組み・アウトリーチが必要だと思われる。

本論文は科学研究費(基盤研究(B))科研費(科研番号26380695)の成果の一部である。

参考文献・引用文献

- 内閣府 「高齢者の生活実態に関する調査」2008年
高齢社会白書 平成22年
読売新聞 朝刊 2014年9月15日 1面
中尾 暢見 「ひとりぼっち社会の到来」社会学論叢
NO173, 日本大学社会学会 2012年
堀 崇樹 「高齢者見守り活動の構成」社会学論叢 NO172,
日本大学社会学会 2011年
吉廣 紀代子 『怖くないシングルの老後』朝日新聞社,
2007年
上野 千鶴子 『おひとりさまの老後』法研, 2008年
三浦 展 『団塊格差』文藝春秋, 2007年
片野 親義 「家族・地域の貧困と向き合う公民館活動の
創造」月刊社会教育 2013年8月号
美若 忠生 「地域づくりと公民館」月刊社会教育 2013年
9月号
酒匂 一雄 「サークルから当事者活動の連帯・交流へ」月
刊社会教育 2012年5月号
菊池 一春 「社会教育職員の室と真価が問われる時代」月
刊社会教育 2013年4月号
手塚 英男 「地域自治-根本の問題に眼を」月刊社会教育
2012年9月号
稲葉 陽二 『ソーシャルキャピタル入門』中央公論, 2011
年